

「三井寺」

清水寺の観音に、一人の女(前シテ)が参籠しています。



面：曲見

今回は「笠之伝」の小書がつくため。



前シテ：千満の母

装束が壺折腰巻と笠に変わっています。

彼女の子、千満は、行方しれずになつて久しく、彼女は子に引き合わせ給えと

一心に祈つてゐるの折つて

子どもに会いたいなら、三井寺へ行きなさい

彼女は少し眠る間に夢の告げを見ました。



夢の告げのままに、母は三井寺へ向かうことにしました。小書「笠之伝」により、間狂言は省略されています。

舞台は園城寺(三井寺)へと移り、後見が鐘樓の作り物を角へ出します。



園城寺の僧が、八月十五日の月を見ようと

弟子の幼子を伴つて講堂の庭に現れます。



寺の能力(アイ)が、幼い人の慰めにと、僧に命ぜられて、

舞を舞います。



向こうの方が騒がしくなってきたので、何事かと思うと、面白き女物狂がやってくるのとこのことです。

能力は幼子に見せようと、僧の反対を押し切つて、物狂を中へ迎え入れます。この物狂は、実は千満の母です。



女物狂：後シテ

笠は小書「笠之伝」の演出です。



我が子の行方を求めて、都から三井寺へと来たのでした。

能力が後夜(午前四時)の鐘を撞くと物狂は謂れのある鐘なので、自分も龍女成仏の縁にあやかり鐘を撞こうと言います。



僧は、狂人の身でどうして鐘を撞くのだと制止しますが、物狂は許しを乞いながら鐘を撞きます。

そして、和漢の鐘にまつわる詩歌を引用しながら、月を眺めます。

すると、それまで黙っていた幼子が、物狂の郷里を尋ねてほしいと僧に頼みます。



その声は千満!

二人は、ついに再会を果たします。

再会を喜んだ母と子は、故郷に帰りました。

